

悲惨な体験

古澤 早百合

私は、昭和十八年四月、大阪城内の大阪陸軍兵器補給廠（しょう）にお国のためと就職しました。第二次

世界大戦は日本が勝つと洗脳され、神風とやらが吹くと固く信じて疑いませんでした。昨今、騒ぎとなっているマインドコントロールの恐ろしさを体験していたのです。

当時は、最近の通勤と違い朝霜を踏みしめ、霜焼けに苦しみながら、防空頭巾（ずきん）にモンペ姿です。モンペのひもに毛糸でつくった藁（わら）人形の形をした身代わり人形とやらを母につけてもらい、大豆を炒ったものを一握り持って、生死

の保障も全く無い状態で家を出て通勤していました。「欲しがりません勝つまでは」の標語を念頭に耐え忍び、空襲警報が発令され鉄道が止まると鴻池新田から大阪城まで歩け、歩けです。途中で馬車に会って、親切なおじさんに乗せてもらったこともありました。

三日間、理由無く休むと“営倉”に入れられると言われていたので、恐ろしくて休むこともかありませんでした。

今でも忘れられないのは、あの鳴野と京橋の間の長い鉄橋を渡ったことです。鉄橋には板をしいていまし

たが、すき間のあるところがあり、下を見ると怖くて足がすくみ、気を失いそうになり、前の人に手を差し延べてもらって、やっと渡り切りました。それから、鉄道が止まっても、どんなに遠回りしてでも、二度と鉄橋を渡ることが出来ませんでした。空襲が激しくなるにつれ、私たちは南を転々と集団で移動しました。大江橋、本町、造幣廠がやられたとき、本町の大倉洋紙店の地下室に逃げ込みました。地下室が波の高

い日の船に乗っているように左右に揺れ、もう死ぬかと思いました。急に母が恋しくなり、人知れず心の中で泣きました。

いつも片町駅から帰っていました。ある日、天満橋の柳の下で、爆撃機に打たれ下駄の前半分と足の指が焼けて無くなった男の人が仰向け